

色彩豊かな装飾品

—武者塚古墳出土の玉—

現在、上高津貝塚ふるさと歴史の広場では、夏休みファミリーミュージアムテーマ展「いろんな色の考古学」を開催しています。今回は、テーマ展で展示している、武者塚古墳出土の玉類についてご紹介します。

武者塚古墳は、古墳時代の終わりごろである七世紀に、桜川左岸の上坂田の台地上に造られた古墳です。昭和58(1983)年に、旧新治村の村史編さん事業の一環で、筑波大学によって発掘調査が行われ、未盗掘の石室から多くの副葬品が出土しました。これらの出土品は国の重要文化財に指定されています。

人骨や装飾品の残存状況から、石室(写真1)には6人が埋葬されたと考えられます。そのうち、3号人骨と5号人骨の2体の首付近から多くの玉類が出土しました。特に5号人骨に伴う玉類は、石室の東



写真1：武者塚古墳の石室

壁と奥壁の隅の方から、首飾りの輪状をなした状態で発見されています。被葬者がネックレスとして実際に身に付けていた様子が伺えます。玉類は合計で96点出土しました。その内訳は、メノウ製の勾玉が12点(写真2の①～⑫)、水晶製の勾



写真2：武者塚古墳出土 勾玉・切子玉・ガラス小玉

玉が1点(⑬)、碧玉製の勾玉が1点(⑭)、蛇紋岩製の勾玉が2点(⑮・⑯)、水晶製の切子玉が1点(⑰)、ガラス製の小玉が79点(⑱・⑲)です。出土した当時は骨片などが多く付着していましたが、丁寧な洗浄によって、鮮やかな美しい姿を取り戻しました。

玉の色を見てみましょう。メノウは、古墳時代前期以降、勾玉などの装飾品によく利用されました。市内の他の遺跡からもメノウ製の勾玉が出土しています。メノウは白色とオレンジ色が入り混じったような色味の石材ですが、武者塚古墳の出土品はオレンジ

色が濃く、鮮やかな美しい色味をしています。水晶も同様に、純度が高く透き通っており、碧玉も濃く美しい深緑色です。蛇紋岩は加工しやすい石材で、磨製石斧の素材としてもよく利用されました。黒っぽい色調の出土品が多いですが、⑮はヒスイのような美しい緑色です。ガラス小玉は、水色、藍色、群青色、青緑色など目を引く非常に美しい色味をしています。

このような美しく鮮やかな玉類の製作には、原材料の獲得から加工に至るまで、多くの時間と労力が費やされたと考えられます。市内でも烏山遺跡(烏山地区)や八幡脇遺跡(おおつ野地区)といった、古墳時代前期の玉作工房が見つかっており、専門の工人によって、丁寧に製作されていたことが想定されます。

これだけ手間のかかった貴重な装飾品を身に付けるのは、身分の高い人々であったことは間違いありません。「色」の美しさは、装飾品としての価値を高め、それを身に付ける人の権威、財力を示す重要な要素の一つだったのではないのでしょうか。

今回ご紹介した玉類は、9月4日(日)まで展示しています。この機会にぜひご覧ください。

関上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(☎826・7111)